

論文

リビアとマルタ 近くて遠い隣国関係

田中友紀（東亜大学非常勤講師）

はじめに

北アフリカのリビアと関係の深い国のひとつにマルタ共和国（マルタ）がある。マルタ、ゴゾ、コミニの主たる3島から構成される小さな国家は、地中海を挟んでリビアと接している。リビアの首都トリポリからマルタのヴァレッタへの直線距離は約356kmで、リビア第2の都市ベンガジまでの距離（約650km）よりもはるかに近い。つい最近まで両国を往来するには第三国を経由するしか方法がなかった¹。

隣り合う国ではあるものの、リビアとマルタのイメージは対局にある。イスラーム・スンナ派が国民の9割以上を占めるリビアは、2011年のムアンマル・カッザーフィー政権崩壊以来、内戦状態にある。かたや、国民の9割以上をカトリック信者が占めるマルタは、観光が基幹産業のEU加盟国である。光と影、もしくは明暗と言っていいほどイメージが対照的な両国ではあるが、これまで歴史的な重なりや接点が数多く存在した。

本稿では、現在は近くて遠い両国の歴史が重なり合っていた先史から古代、リビアとマルタの運命が引き裂かれた1565年の「マルタ島包囲戦」、そしてリビアとマルタが急速に接近した1970年から80年代を中心に振り返ってみたい。



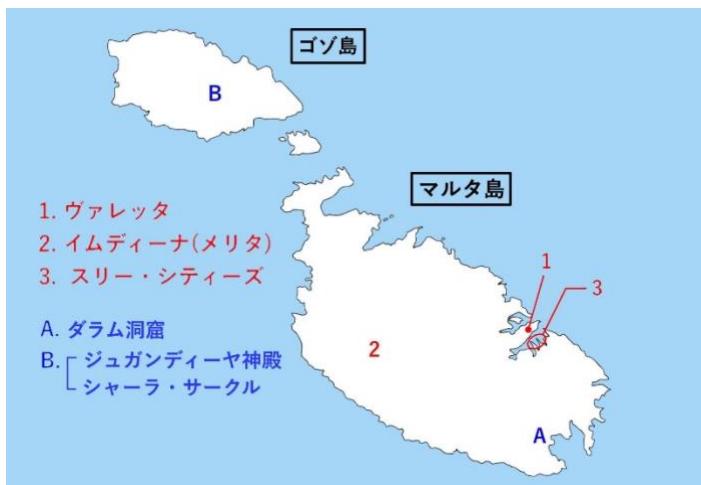
1. イスラーム到来までのリビアとマルタ

現在、日本の高校生が使っている世界史の教科書には、リビアはおろかマルタもほとんど登場しない。例外は、1989年に行われた「マルタ会議」だけである。マルタには、エジプトのピラミッドやイギリス

¹ 現在（2022年5月末）、リビアーマルタ間の定期航空路線はないが、不定期に直行便が運航されるようになった。

のストーンヘンジより古い時代に高度な「巨石文明」が栄えているが、この文明は世界史の教科書では全くといっていいほど触れられてはいない。

マルタに初めて人間がやってきたのは、紀元前 5900 年頃だとされる。クイーンズ大学ベルファストのキャロライン・マローン (Caroline Malone) を中心とする調査チームは、ゴゾ島のシャーラ・ストーン・サークル (Xaghra Stone Circle) で発見された人骨から放射性炭素を測定し年代を測定した。さらに、これらの人骨から、ヨーロッパ、アフリカ、シチリア方面から人々がマルタに渡ってきたことも明らかになった²³。マローンによれば、この時代にゴゾに住み着いた人々は長期間に渡り定住することはなかったという。



図② マルタとゴゾの位置

筆者作成

同前のチームによれば、次にマルタに人間がやってきたのは、紀元前 3850 年頃であるという。シチリアからやってきた人々は、約 1500 年間マルタに定住し、多くの神殿を建設した。この時代で最も有名な遺跡は、紀元前 3600 年から 3200 年の間に建造された世界最古の石造建築物であるジュガンディーヤ神殿 (Ggantija) だ。

この遺跡は非常に大きな石灰石を組み合わせてできている。神殿を形成する石灰石の中

で大きいものは長さ 5 メートル、重さは 50 トン以上だとされるが、この巨石を切り出す技術、運搬した方法などについては明らかになっていない。ゴゾ島の伝承では、「サンスーナ」という女性の巨人がジュガンディーヤ神殿を一日で作ったという伝承が残っている。現在も、マルタにはジュガンディーヤ神殿を筆頭に巨石神殿が 30 基ほど残っている⁴。

この神殿時代と呼ばれる時代を経て、次にフェニキア人が到来するまで、マルタには「空白」の時期があった。この期間に遺跡が発見されていないことがその大きな理由であるが、先述したマローンも神殿時代の人々は紀元前 2350 年頃に起きた気候変動や災害で絶滅したのではないか、との見解を示している。また、レバノンの遺伝子科学者ピエール・ザッロウア (Pierre Zalloua) もマルタ人の 3 分の 1 が古

² マルタに最初の人々がやってきた時期は、紀元前 5000 年、5200 年、5400 年など様々な説があったが、本稿ではクイーンズ大学ベルファストキャロライン・マローンを代表とする FRAGSUS プロジェクトの最新の研究発表に依拠する。Malone, C., Stoddart, S., McLaughlin, R., Hunt, C., French, C., & Grima, R. (2020). Temple Landscapes: Fragility, change and resilience of Holocene environments in the Maltese Islands. McDonald Institute for Archaeological Research Cambridge.

³ マルタ島ビージャブージャ (Birżebbuġa) 村のダラム洞窟 (Għar Dalam) からも、紀元前 5400 年頃の陶器の欠片が見つかっている。この欠片は、シチリアの遺跡で発見された陶器と酷似しているという。ダラム洞窟は、長さ 144 メートルの小さな鍾乳洞だが、50 万年前の地層からドワーフ象の化石などが発掘されている。

⁴ そのなかでも主要な 5 神殿が、1992 年にユネスコの世界遺産として登録された。

代フェニキア人の末裔であるという興味深い調査結果を発表し、現代マルタ人は巨石神殿を作った人々の子孫ではないという説がさらに優勢となつた⁵。

そのフェニキア人であるが、海洋交易で地中海を席巻した彼らがマルタへ到来したのは、紀元前 800 年頃だと言われている。その時代のマルタはフェニキア人からマレット (Malet) と呼ばれていた。紀元前 480 年頃になると、フェニキア人の都市国家カルタゴはマルタにメリテ (Melite)、ゴゾ島にガウロス (Gaulos) と言う植民都市を築いた。マルタはカルタゴにとって、シチリア島の植民市に行くまでの重要な中継地点であった。同じ時代のマルタには、同じくシチリアに植民市を建設していたギリシア人も到来し、互いに共存共栄していたとされる⁶。

カルタゴ支配のマルタにローマが侵攻してきたのは、第 1 次ポエニ戦争中の紀元前 257 年であった。しかしこの時、ローマの執政官ガイウス・アティリウス・レグルス・セッラヌス (Gaius Atilius Regulus Serranus) はメリテの完全掌握に失敗し、カルタゴはメリテを支配し続けた。その後、紀元前 218 年に執政官ティベリウス・セムプロニウス (Tiberius Sempronius) が完全征服を成し遂げ、以降マルタの島々は共和政ローマの属州となりメリテはメリタ (Malita) と呼ばれるようになった⁷。

他方、リビアもマルタと似たような歴史の変遷を経ている。ただ、リビアにはマルタよりかなり古い時代から人類が存在した形跡がある。リビア東部沿岸のスーサ市東部のハウアー・フティヤー洞窟 (Hawā Ftiyah) では、8 万年前の人間の下顎骨が見つかった⁸。その次に古いものは、アルジェリアの国境に近い砂漠地帯にあるタドゥラールト・アカクース (Tadrārt Akākūs) 遺跡である。同遺跡では、紀元前 1 万 2000 年前頃から 1 世紀までに描かれた壁画が数多く残っており、1985 年にユネスコの世界遺産に登録された。1 万年前の壁画には水辺に住むサイやワニが描かれていることから、当時のリビアは緑豊かな場所であったことが推測される。

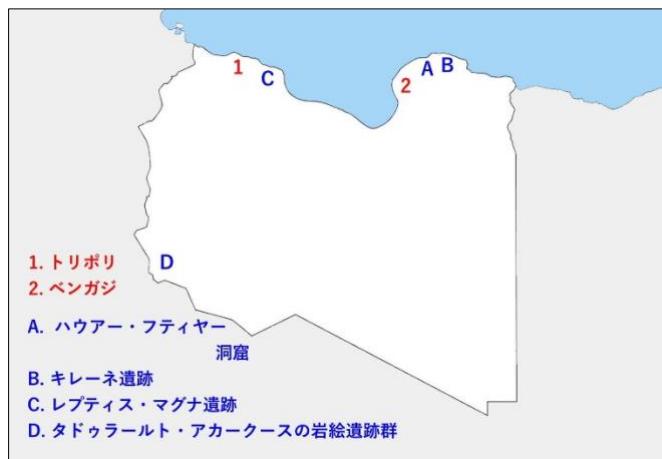
リビアへフェニキア人が往来し始めたのは、マルタより早い紀元前 10 世紀頃である。紀元前 630 年頃になると、フェニキア人が西部沿岸にレプティス・マグナ、オエア (現在のトリポリの位置)、サブラータという植民市を建設し、しばらくしてこれらの都市はカルタゴの支配下に置かれるようになった。こ

⁵ ザッロウアは、古代フェニキア人の遺伝子に関する共同プロジェクトをナショナルジオグラフィック社と行い、2004 年 10 月号でその成果を発表した。詳しくは、Zalloua, P. A., Platt, D. E., El Sibai, M., Khalife, J., Makhoul, N., Haber, M., ... & Tyler-Smith, C. (2008). Identifying genetic traces of historical expansions: Phoenician footprints in the Mediterranean. *The American Journal of Human Genetics*, 83(5), 633-642.

⁶ 17 世紀末、紀元前 1 ~ 2 世紀頃に作製されたみられるフェニキア語とギリシア語が刻まれた 1 対の白い石碑がマルシャシュロックで発見された。メルカルト神を称えたこの石碑は、1782 年に聖ヨハネ騎士団からルイ 16 世に贈呈された。現在、ルーブル美術館とヴァレッタにある国立考古学博物館にそれぞれ収蔵されている。

⁷ 紀元前 1 世紀頃、ローマ人は現在のイムディーナとラバトの境に広大な屋敷を建てた。のちに、「ドムス・ロマーナ (Domvs Romana)」と呼ばれる邸宅である。のちのアラブ時代に、古代都市メリテ (メリタ) はマディーナとラバトという 2 つの地域に分割された。

⁸ 1950 年代に発掘が開始されたハウアー・フティヤー洞窟は、開口部の幅 80 メートル、高さ 20 メートルにも及ぶ。地中海沿岸地域で最大級の洞窟である。現在、同洞窟はユネスコの暫定リストに入っている、15 万年前から 20 万年前の人類が住んでいた可能性があるとされている。



図③ リビアの地図

筆者作成

の3都市は総称され「トリポリタニア」と呼ばれるようになった。一方、東部沿岸には、エーゲ海のサントリーニ島方面からギリシア人が到来し、キレーネ（キュレーネ）など植民市が建設された。キレーネの王となったギリシア人バットウスは、マルタの王でもあったとの伝承が残っている。第3次ポエニ戦争が終結した紀元前146年、トリポリタニアはマルタより70年ほど遅くローマの属州となった。

マルタとリビアにキリスト教がもたらされた

のは、ローマ帝国時代である。時期はマルタの方が少しだけ早く、イエスの使徒聖パウロが60年にキリスト教をもたらしたとされる。伝承によれば、パウロがエルサレムからローマに連行される途中、マルタ島の北で船が難破し、パウロは島へ漂着したという。このパウロのマルタ上陸の話は、新約聖書の『使徒言行録』にも記されている。パウロはラバトにある洞窟に滞在したが、その間にいくつかの奇跡を起こし、島民たちに信頼を寄せられるようになった。特に、当時のマルタ島で指導的地位にあったパブリウスは、自身の病気の父に対してパウロが奇跡を起こしたことにより感謝を受け、パウロから洗礼を受けてマルタで初めてのキリスト教徒となり、のちに司祭となったという⁹。

リビアにキリスト教が到来したのは、マルタとほぼ同時期の68年頃と言われている。初期のキリスト教はエジプトからリビア東部のペントポリスに伝來した。当時のリビアは、キリスト教との関わりが深く、新約聖書にもイエス・キリストの十字架を担いた人物が「キレーネからやってきたシモン（Simon）なる男」との記述もみられる。2世紀末から3世紀の初めにかけては、トリポリタニアのレプティス・マグナ¹⁰からは、ローマ帝国史上初のアフリカ属州生まれの皇帝、セプティミウス・セウェルス（Septimius Severus；在193～211）が輩出され、キリスト教界においても同地出身の第14代ローマ教皇ヴィクトル1世（在189～199）が誕生した¹¹。325年のニケアの第一回目の公会議の記録には、リビア¹²、ペントポリス（ギリシアの植民地キレーネがあった周辺一帯）の教区がアレクサンドリアの司教区の支配下に入ったとの記述が残っている。

⁹ パウロがマルタに漂着したという伝説は、その真偽をめぐって激しい論争が続いている。

¹⁰ リビアの古代都市レプティス・マグナやサブラーについて、塩尻和子編（2020）『リビアを知るための60章』第2版、明石書店。が大変詳しい。リビアの古代都市の詳細な情報や、日本人がめったに立ち入ることができないエリアの貴重な写真が惜しみなく掲載されている。

¹¹ Oden, T. C. (2011). Early Libyan Christianity: Uncovering a North African Tradition. Downers Grove, Ill: IVP Academic.

¹² この「リビア」の表記は、ニケア公会議の記録をそのまま日本語に訳出したものである。この会議に参加したアリウス（260～336）は「リビア出身の司祭」として知られているが、彼が生まれたのはリビアのプトレマイオス（ペントポリスを形成する都市のひとつ）である。したがって、本稿ではこの「リビア教区」なる場所がどこかを指しているかについては明らかにすることができない。

395 年にローマ帝国が東西に分裂すると、リビアもマルタもビザンツ帝国（東ローマ帝国）の支配下となった。とはいっても、ビザンチン支配時代のマルタも、そしてリビアのトリポリタニアもヴァンダル人から 454 年、455 年とそれぞれ侵入されている。さらにマルタは 464 年にゴート族から侵入され、ビザンチンが再び統治権を手にしたのは 533 年であった。

イスラーム勢力が侵攻してきた時期は、リビアがマルタより 2 世紀ほど早い。ウマイヤ朝初代カリフのムーア・ウィヤの時代にエジプトを征服した將軍、アムル・イブン・アル=アースは 642 年にキレナイカを征服、644 年にはビサンチン支配のトリポリも支配下に置いた。他方、マルタは 870 年にアッバース朝の地方独立政権であるアグラブ朝¹³に征服された。歴史家イブン・アスィール (*Ibn al-Athīr*) は、シチリア島のパレルモにいたアラブ総督のムハンマド・イブン・ハファージャ (*Muhammad ibn Khafāja*) が同年 8 月 29 日に中心都市メリテ（現在のイムディーナ）を制圧したとの記録を残している¹⁴。

しかし、マルタ側にはアラブ支配時代についての資料がほとんど残っていない¹⁵。存在するのは、アラブ勢力がやってきた 870 年の記録と、1091 年にマルタを征服したノルマン人による記録である。マルタに残る資料がかなり少ないとおり、マルタのアラブ時代についての詳しい研究は希薄となっている¹⁶。とはいっても、マルタがアラブに支配されていたことは間違いないだろう。その証拠が、アラビア語シチリア方言をラテン文字表記したマルタ語である。人名、基礎的な単語にもアラビア語の影響は今も数多く残っているが、わかりやすくマルタの地名を一部ご紹介したい。

たとえば、マルタ島の北西部の少し高くなっている丘陵地に「イムディーナ」と言う古都がある。メリテの時代から続く島の中心地「マディーナ」であることから、「イムディーナ (L-Imdina)」と呼ばれる。そしてその西隣には「ラバト (Ir-Rabat)」という地区が広がる。さらに、アラビア語の「マルサ (Marsa、港の意)」を使ったグランドハーバーの一番奥の地区的名前「マルサ (Marsa)」、それが語頭についたマルサシュロック (Marsaxlokk)、マルサスカラ (Marsaskala)、またザイトゥーン (Żejtun、オリーブ)、アーブ (Għarb、西)、グジラ (Gżira、島) 等の地名もある。

¹³ アグラブ朝の本拠地は、カイラワーン（チュニジアの首都チュニスの南方 120km）である。

¹⁴ マルタがアラブに支配された年代は、868 年と 870 年とも言われている。

Mercieca, S. (2010). The Failed Siege of 868 and the Conquest of Malta by the Aghlabid Principality in 870, The Malta Historical Society.

<https://www.um.edu.mt/library/oar/handle/123456789/29186>.

¹⁵ 特に、ゴゾでは 1551 年に全島民がトリポリに連行されたこともあり、そもそも中世の記録が残っていない。しかし、マルタの歴史家ゴッドフリー・ウェッテンガー (Godfrey Wettinger) は、イムディーナ大聖堂に残る記録を解読し、中世のマルタやゴゾの社会について明らかにした。しかし、このなかでもアラブ時代の記述はほぼない。Wettinger, G., & Camilleri, M. (2018). Aspects of daily life in late Medieval Malta and Gozo.

¹⁶ マルタのアラブ支配の実態についての関心は希薄であるが、聖パウロが伝えた初期のキリスト教がアラブ時代に絶えたかどうかの研究はマルタで熱心に行われている。Brincat, J. (1991). Malta 870-1054: al-Himyari's account. Said International. など。

2. リビアとマルタを引き裂いた「マルタ包囲戦」

先史から中世まで、時期は少しずつ異なるがリビアとマルタは同じ民族や王に支配されてきた。しかし、16世紀にこの2つの地が徹底的に引き裂かれる出来事が起きる。それが、1565年の「マルタ包囲戦」である¹⁷。

包囲戦に至るまでのマルタの歴史を振り返ってみよう。先に述べたように、9世紀から200年以上アラブの支配下にあったマルタであるが、1091年にノルマン人に征服された。初代シチリア伯ルッジェーロ1世とその息子ルッジェーロ2世（初代シチリア王）はアラブ文化に寛容であったこともあり、統治下のマルタではムスリムとクリスチヤンが平和に共存することができた。マルタの支配者がノルマン・オートヴィル朝からホーエンシュタウフェン朝に移ってもなお、マルタにはクリスチヤンを超える数のムスリムが居住していた。フリードリヒ2世時代の1240年にアボット・ギルバート（Abbot Gilbert）という人物が行った調査では、マルタ島とゴゾ島にムスリムが836世帯、クリスチヤンが250世帯、ユダヤ人が33世帯ほど住んでいたとされる¹⁸。しかし、13世紀半ばまでにマルタのムスリムはキリスト教に改宗させられたり、島から追放された¹⁹。13世紀から15世紀までマルタの領有権はフランス王家の流れを汲むシチリアのアンジュー家、1283年にマルタの戦いで勝利したアラゴン王国、1479年にはスペイン王国の手に渡った。

同じくトリポリも、1510年にアラゴン王フェルナンド2世の名代のペドロ・ナヴァーロ（Pedro Navarro）に征服され、アラゴンの領有となった。1516年にフェルナンド2世が死去し、孫のカルロス5世（神聖ローマ帝国カール5世）がスペイン王として即位したため、トリポリもまたスペイン王国領となつた。カルロス5世は1528年にトリポリをカトリック騎士修道会の「聖ヨハネ騎士団」に授与し、その守護を命じた。彼らが、のちにマルタを長期に渡って統治する、通称「マルタ騎士団」である²⁰。2年後の1530年、カルロス5世は毎年鷹一羽の献上を条件に、聖ヨハネ騎士団へマルタ島とゴゾ島を永年貸与した。カルロス5世は、破竹の勢いで地中海を西進してくるオスマン帝国軍に対する防波堤としての役割を騎士団に期待したのである。

しかしながら、1517年にリビア東部（キレナイカ）はオスマン帝国から征服された。当時の地中海では、通称ドラグー、トゥルグート・レイース（Turgut Reis）というオスマン帝国海軍司令官が勢力を急

¹⁷ マルタではThe Great Siege（L-Assedju l-Kbir）、つまり「大包囲戦」とされているが、本稿では中立な立場をとつて、「包囲戦」とした。

¹⁸ 1223年にイタリアのルチェーラにムスリム居住区ができたため、マルタのムスリムはそちらに送られたと考えられていたが、1240年の調査でマルタに多くのムスリム家族が住んでいたことがわかつた。詳しくは、Goodwin, S. (2002). *Malta, Mediterranean Bridge*. Westport, Conn: Bergin & Garvey.

¹⁹ イブン・ハルドゥーンは、1249年にマルタのムスリムがルチェーラに送られたと記述している。

²⁰ 現在の聖ヨハネ騎士団の正式名称は、「エルサレム、ロードス及びマルタにおける聖ヨハネ主権軍事病院騎士修道会（The Sovereign Military Hospitaller Order of Saint John of Jerusalem, of Rhodes and of Malta）」である。現在、領土を持たないが、国際法上は主権国家である。聖アンジエロ砦の一部は今なお聖ヨハネ騎士団員が常駐しており、マルタ政府から聖ヨハネ騎士団へ治外法権が与えられている。

速に拡大させていた。1551年7月、トゥルグート率いるオスマン帝国軍はゴゾ島を攻撃し住民5000人を連行してそのままトリポリへ侵攻し、同年8月に騎士団が守る同都市を制圧した。トゥルグートは自トリポリのベイを名乗り、のちにスライマーン1世からトリポリタニアのサンジャック・ベイ（州知事）の称号を与えられた。さらに、1560年5月、聖ヨハネ騎士団を含むキリスト教連合艦隊はオスマン帝国軍とチュニジアのジェルバ島で交戦（ジェルバの戦い）し、壊滅的敗北を喫する。ジェルバ島からマルタへ帰還した騎士団員たちはすぐに本格的な籠城の準備に取り掛かった。

そして、ジェルバの戦いから5年後、1565年5月18日。ついにオスマン帝国艦隊がマルタ本島南東沖に姿を現した。ここから、ムスリムとクリスチャンの戦いの潮目となる壮絶な包囲戦が3か月続く。この「マルタ包囲戦」については、これまで大変多くの研究書、書物が出版され、特に弱小の聖ヨハネ騎士団がオスマン帝国の大軍を撃退できた要因について様々な議論が行われてきた。いずれにしても、それらが最も依拠しているのは、フランシスコ・バルビ・ディ・コレッジョ（Francisco Balbi di Correggio）なる人物が記した日記だ²¹。バルビは、スペインから派遣されたイタリア人歩兵で、マルタ包囲戦を直接目撃した人物である。同書の初版は包囲戦からたった2年後の1567年であった。

聖ヨハネ騎士団としての公式の記録は、ジャコモ・ボッシオ（Giacomo Bosio）が綴った『エルサレムの聖ヨハネ騎士団の神聖な宗教と輝かしい戦いの歴史（Dell'Istoria della Sacra Religione et Illustrissima Militia di San Giovanni Gierosolimitano）』である。ボッシオは騎士団総長に依頼され、聖ヨハネ騎士団の歴史とヴァレットの功績について記録を編纂した。初版は1588年である。以来改訂しながら再版が続いているが、国外にあることもあり直接解読する機会を得ていない。本稿では、入手できたバルビの英訳 *The Siege of Malta 1565* を参考にしながら大包囲戦の顛末を簡単に示したい。

スレイマーン1世の命を受け、ピアレ・パシャとムスタファ・パシャ率いる約4.8万人の大軍を擁したオスマン帝国軍は、マルタ島南東部マルシャシュロックの入り江から上陸した。マルタ側は、騎士団、住民、兵士とともに聖アンジェロ砦、聖ミケーレ砦、イムディーナの城塞にそれぞれ立て籠もった。騎士団総長ジャン・ドウ・ヴァレット（Jean de Vallette）は聖アンジェロ砦に総司令部を置いた。当初、マルタ側の主な兵力は騎士団員500人、マルタの住民3000人であった。

オスマン帝国軍は北上しシベラス半島の先にある聖エルモ砦を包囲、双方多くの犠牲者を出して6月23日にオスマン帝国軍は同砦を制圧した。バルビによれば、オスマン帝国軍が騎士団の本拠地の聖アンジェロ砦ではなく先に聖エルモ砦を攻撃したこと、また先述したトゥルグートの到着を待たずに戦闘を開始したことがオスマン帝国軍をかなり消耗させたという。聖エルモ砦を奪ったオスマン帝国軍はシベラス半島に砲台を並べ、グランドハーバーを挟んで騎士団総長ヴァレットが立てこもった聖アンジェロ砦を攻撃した。しかし、マルタ側の周到な籠城準備が功を奏し、オスマン帝国軍は初秋に入ても聖アン

²¹ 本稿では、入手できたErnle Bradfordの英訳 *The Siege of Malta 1565* を参考にした。Bradfordは初版ではなく1568年に出版されたBalbiの日記を英訳している。このBradfordによる英語版の日本語訳もある。Ernle Bradford, 訳 井原裕司 (2011)『マルタ島大包囲戦』元就出版社。しかし、筆者は同書を入手できなかつたため、Bradfordの訳から日本語に訳出した。

ジェロームは陥落させることができなかった。9月7日、シチリア副王が率いる援軍8000人がマルタ島北部メリッハ、そしてセント・ポールベイに到着すると、地中海の恐ろしい夏の暑さと飢えで疲労困憊となっていたオスマン帝国軍は征服をあきらめマルタから退却した。包囲戦の終盤、トゥルグートは戦闘中に亡くなつており、その遺体がトリポリに運ばれたとの記録が残っている²²。



写真①

バチカン美術館にある Egnazio Dant の筆によるフレスコ画の複製。マルタ政府の機関、Heritage Malta ホームページより。

左がシベラス半島。その先にあるのが聖エルモ砦。シベラス半島右の海域がグランドハーバー。右手の半島で大きな十字の旗がはためいているのが、騎士団が立てこもった聖アンジェロ砦である。

この「マルタ島包囲戦」がリビアとマルタを引き裂く決定打となり、その後2つの地は全く違う運命を背負うことになった。苦しい戦いに勝利した聖ヨハネ騎士団には、ローマ教皇、ヨーロッパの王や貴族から多大なる寄付が与えられ、騎士団長ヴァレットの名を冠した新しい城塞都市ヴァレッタが築かれた。同時に、聖ヨハネ騎士団は住民がいなくなったゴゾ島の復興にも力を入れ、マルタ島の住民に入植を勧めた。その後、1571年のレパントの海戦でオスマン帝国軍が敗走すると、地中海における勢力図はスペインが優勢となり、騎士団とオスマン帝国との直接的で大規模な戦闘は鳴りを潜めた。マルタ島民は騎士団に守られ、2世紀以上に渡り平和な歳月を享受したのである²³。

対してリビアの地は、1551年以降オスマン帝国が支配しムスリムが住む地となった。しかし、オスマン帝国の支配は間接的で、1711年にはトリポリを中心とした西側沿岸部にカラマーンリー朝という地方独立政権が誕生した。19世紀になると、バルカと呼ばれていた東部や内陸部の砂漠地帯では、イスラーム神秘主義集団であるサヌースィー教団が地元の部族を取り込み、その影響力を拡大させた。

しかし、今のリビアの領土を統一するような政権は誕生せず、リビアは遠きイスタンブルに緩やかに支配され続けた²⁴。

18世紀末になると、マルタでは大きな体制転換が起きる。1798年6月、エジプト遠征中のナポレオン・ボナパルトが水と食料の補給を求めてマルタの開港を聖ヨハネ騎士団に求めてきた。しかし、騎士団側が入港できる船の数を限定するなど対応が芳しくなく、業を煮やしたナポレオンはオスマン帝国軍と

²² トゥルグートは1551年に占拠したトリポリの騎士団の館を改築して自身の名を冠したモスクを建立した。彼の遺体は同モスクに埋葬された。Jamil, M. A.-N. (1987). *A History of the Maghrib in the Islamic period*. Cambridge: Cambridge University Press.

²³ 聖ヨハネ騎士団の統治下の17世紀、オスマン帝国軍兵士がマルタ島に数回侵入した記録が残っている。

²⁴ リビア連合王国の初代国王イドリースについては、塩尻和子編（2020）『リビアを知るために60章』第2版、明石書店。のコラム2で筆者がその人物像に迫っている。なお、筆者は同書の25章、コラム7、コラム8において、現代リビア社会の問題、ヨーロッパを目指す難民問題などについても執筆を行っている。

同じくマルシャシュロックから軍を上陸させた。当時、フランスではブルジョア革命が起り、アンシャンレジームの中心であった聖職者の特権は剥奪されていたにもかかわらず、当時の聖ヨハネ騎士団総長フェルディナント・フォン・ホンペシュ・ツー・ボルハイム (Ferdinand von Hompesch zu Bolheim)²⁵は、騎士団の中立的な立場や、フランス出身者が大多数を占める組織であることを鑑みて、マルタから追放されるようなことはないと油断をしていた。ナポレオンの突然の侵攻に際し、聖ヨハネ騎士団は戦闘の準備も士気も不十分で島を明け渡すしか術がなく、2世紀以上に渡るマルタ統治はあっけなく終わりを告げた。

マルタの統治権を握ったフランス軍は、封建制度を廃止し、教会財産を没収するなど急進的な改革を行った。マルタ島民はフランス軍が島民の共有財産である教会に手を出したことに激しく憤り、第2の要塞イムディーナで、そしてゴゾ島のチッタデルで反乱を起こした。最終的に島民らはイギリスから援軍を得て、フランス軍を追放することに成功した。フランスのマルタ支配はたった2年で終わったのである。

以来、マルタは1964年までイギリスの支配下に置かれた。詳しくいうと、まずマルタはイギリスの保護領となり、1814年のパリ条約にて正式にイギリスの植民地となったのである。マルタには1937年までイギリスの地中海艦隊総司令部が置かれ、ジブラルタルやキプロスと並ぶ地中海におけるイギリスの主要基地となった。また第一次世界大戦ではガリポリの戦いで負傷した連合国軍の兵士を数多く収容し、「地中海の看護婦」とも呼ばれた。

第二次世界大戦においてのマルタは、北アフリカ戦線への補給路の重要な中継基地となった。リビアやエジプトの北アフリカ戦線とイタリアのシチリア島の中間に位置するマルタは、枢軸国の爆撃の対象となつた。中心都市ヴァレッタや、その対岸のイギリス軍の司令部があったスリー・シティーズは、1940年6月からほぼ毎日激しい爆撃を受け、壊滅状態となつた。第二次世界大戦中、マルタへの空襲総数は3,343回に上り、1,581人の民間人が亡くなつたと伝えられる。総人口の18.5%に相当する5万人が家を失うなど悲惨な状況であった²⁶。戦火を耐え忍ぶマルタ国民に対して、1942年にイギリス国王ジョージ6世からは文民が授与できる賞で最も位が高い「ジョージ・クロス」褒章を与えられたが、国民の間ではイギリスに対する不満が高まり始めていた。

他方リビアは、1911年にオスマン帝国が伊土戦争で敗れたことでイタリアの植民地となった。イタリアは人口の少ないリビアの地へ国民が入植することを奨励し、多くのイタリア人が新しい土地を求めてリビアに渡った。イタリアの植民地支配の初期は穏健で、イタリアはリビア人に自治を与えようとし、「トリポリア共和国」なる自治政府も創設された。しかし、1922年にイタリアでムッソリーニ政権が樹立されるとリビア支配は過酷になり、イタリアは「レコンキスタ（国土回復運動）」をスローガンに掲げ、リビア住民から土地や財産を没収し、従わないものに対しては収容所での生活を強要するなどした。

²⁵ 第71代聖ヨハネ騎士団総長、騎士団で初めてのドイツ出身者である。

²⁶ 2020年5月31日 *Malta Independent*.

だが、このようなイタリア支配にリビア東部のキレナイカでは住民たちは激しく抵抗を示している。当時のキレナイカにおける最大権力者はサヌースィー教団の指導者ムハンマド・イドリース・サヌースィーであったが、1922年にエジプトに避難していたため、代理としてウマル・ムフタールというサヌースィー教団の老師が地元の部族を率いてイタリア軍と戦い続けた。ムフタールは砂漠のゲリラ戦でイタリア軍を10年以上翻弄したが、イタリア軍に捕らわれ、1931年に絞首刑に処された。公式な記録は残されていないが、キレナイカでは総人口の3分の1とも2分の1とも伝えられる多くの人々の命が失われたという。

3. カッザーフィー（カダフィ大佐）とミントフ 「血を分けた兄弟」

第二次世界大戦が終結すると、マルタもリビアも形は違えどイギリスに占領されることになった。正確に言うと、リビアの内陸部のファッザーンをフランスが、そしてトリポリタニアとキレナイカはイギリスが軍事統治を行った。そしてマルタは、第二次世界大戦前と変わらずイギリス植民地の地位のままであった。

1943年から軍事統治下に置かれたリビアでは、国際連合の仲介で地域代表による会議が行われた。キレナイカやトリポリタニアがそれぞれ独立を模索し対立する中、国連の弁務官エイドリアン・ペルトはリビアをそれぞれの地域が自治権を持つ連邦王国として独立させることに決定した。1951年12月24日、リビアはサヌースィー教団の4代目指導者、イドリース・サヌースィーが王となり「リビア連合王国」として独立した。アフリカの旧植民地のなかで一番早い独立であった。

一方、マルタでは労働党がイギリスからの独立を求めるようになっていた。1955年に首相兼財務大臣となったマルタ労働党のドミニク・ミントフ（Dominic Mintoff.）は、マルタの完全独立を求めてイギリスと激しく対立し、1958年には抗議のために首相職を辞して独立運動を展開するようになった。1964年にマルタはイギリス連邦下で独立したが、多くの国民は納得しておらず、イギリス支配からの完全脱却を公約に掲げたミントフが1971年の総選挙で勝利し、再び首相に返り咲いた。1974年、マルタは共和国となり、ミントフ・労働党政権はイギリスに対する強い経済依存を断つて、中立・非同盟主義へ大きく舵を切った。

再びリビアである。1960年代末、リビアではナセルに影響されたアラブナショナリズムが席巻し、ムアンマル・カッザーフィーと若手将校ら「革命指導評議会（RCC）」による共和革命が1969年9月1日に発生した。イギリスの傀儡であったことを激しく非難した RCC は王から権力を奪取し、第二次世界大戦以降リビアに駐留し続けるイギリス軍の撤収を強く要求した。イギリスは RCC の求めに応じ、1970年までに軍の引き揚げを完了させた。

リビアと同様に、1974年に共和制となったマルタもイギリス軍の撤収を要求した。200年以上に渡つてマルタを支配していたイギリス軍は、1979年に完全撤退を完了した。がしかし、マルタの財政はこれまでイギリスに軍事基地を提供することで成り立っており、資源もなく、産業もなく、乾ききった荒れ果

てた農地しかないマルタは経済的に将来の見通しが立たず隘路に陥った。

このようなマルタの苦境に手を差し伸べたのがカッザーフィーである。リビアは王国時代末期から本格的になっていた石油輸出によって好景気に沸いており、カッザーフィーは自国と同じくイギリスと決別したマルタに対して大規模な支援を行った。どういう意図で言ったかは定かではないが、カッザーフィーもミントフも互いを「血を分けた兄弟（義兄弟）」と何度も呼んでおり²⁷、ミントフ時代の1976年、1978年、1979年、1982年、1984年と合計5回もマルタを訪れて友好を深めている。あくまで推測であるが、歴史好きなカッザーフィーは、マルタにアラブ支配があったことと、両国ともフェニキアやギリシアの末裔が多いこと、そして英国の支配から抜け出した同胞という意味を込めて大げさに呼び合ったのかもしれない。

1984年、カッザーフィーとミントフは今後の安全保障に関する条約「リビア・マルタ平和協力条約」を締結した。この時期のリビアはテロ事件の首謀国として世界的に孤立しており、特にアメリカとの関係は先鋭化していた。マルタがリビアと条約を結ぶのは、米国を敵にする行為であった。



写真②

2016年3月30日 *Malta Today*.

ヴァレッタのオーベルジュ・ドウ・カスティーリヤの前で手を振る右カッザーフィーとミントフ。日付が書いていないが、服装から1979年3月31日だと考えられる。

カッザーフィーがミントフ政権下のマルタと近しかった例をいくつか紹介したい。1970年代末、マルタでリビア政府の支援でモスクを建てるという話が持ち上がった。リビア政府はマルタ本島の西部のパオラにあるカトリック聖堂を買い取り、その建物をモスクに改装した。この「マリヤム・バットゥールモスク」は、マルタ政府が国内で唯一認定しているモスクである。カッザーフィー政権崩壊後、このモスクがどのように運営されているのかはわからぬが、カッザーフィー政権下ではリビア政府が維持および管理を行ってきた。マルタは共和国憲法で国教がローマ・カトリックだと規定される国だが、カッザーフィー時代にこのモスクに集まる人々と地元住民の間にトラブルがあったとの記録は見つけ出せていない。筆者がリビアの印象について聞いた50代から70代のマルタ人は、1970年代に公立学校でアラビア語が第二外国語として教えられていたことや、1970年から80年代の初めにかけてマルタにかなり多くのリビア人が住んでおり、近所に住むリビア人の子供たちとよく一緒に遊んだことなどを懐かしそうに教えてくれた。

別の事例は、リビアとマルタ間の大陸棚境界策定をめぐる交渉についてである。この境界の策定は両国の長年の懸案であったが、この紛争はミントフが首相になって2年後の1976年に国際司法裁判所(ICJ)

²⁷ 2011年9月20日 *The Times of Malta*, <https://timesofmalta.com/articles/view/Blood-brother-politics.385535> 他多数。

に突然付託された。1985年、ICJはリビアとマルタの中間線から北側に境界を画定する判決を出し、1986年にリビアとマルタは合意に至った。だが当時、テロ事件関与を疑われ国際社会で孤立していたカッザーフィーがICJの裁定に素直に従うことは、にわかに信じられない。それだけ、ミントフとカッザーフィーは特別な関係であったことが伺えよう。

しかしながら、マルタとリビアの蜜月は冷戦終結の1987年までであった。ミントフは1984年に首相を退任し、ミスフード・ボンニーチ（Mifsud Bonnici）が労働党政権を引き継いだが1987年には終焉を迎えた。その後、国民党のエドワード・フェネク・アダミ（Edward Fenech Adami）が首相となり、マルタは親欧米政権となった。1996年から1998年に一時的に労働党政権が移ったものの、国民党に政権が戻り、マルタは2004年5月にEUの一員となった。また、1980年代のテロ事件や核兵器保有の疑いという理由から国際社会によって経済制裁が与えられていたリビアも、2003年に国際社会に復帰した。そして、2011年にリビアで民主化デモが起こるまで、リビアとマルタの関係はカッザーフィー・ミントフ時代のように接近することなくとも、悪化に転じるようなことはなかった²⁸。

おわりに

現在、人口約51.6万人²⁹のマルタに約3600人³⁰のリビア人が住んでいると言われる。この数字はマルタの非EU圏の滞在者のなかでは一番多い。ただし、リビアの内戦悪化から一時的に避難してきた人々や語学学校に通う学生、また帰化してマルタ国籍を取得しているリビア人もおり、発表されている人数以上にリビアにルーツを持つ人は多いと思われる。他方、泥沼の内戦状況が改善しないリビアに渡航、滞在するマルタ人の数も増加傾向だ。マルタの地元紙Times of Maltaによれば、建築、石油関連の事業で出張しているビジネスマンが多いという。筆者の周りでも内戦下のリビアに躊躇なく渡航する人たちが多く、驚きを隠せない。もちろん、トリポリのマルタ大使館は退避していない。

しかし、リビアの内戦が長引き、選挙が行われないなど政局が硬直化するにつれて、マルタに住むリビア人と地元民の間に不協和音が聞こえてくるようになってきた。スリーマの盛り場でマルタ人とリビア人の若者が酔ってケンカをしているという話はめずらしくなく、2019年には中学生の間でもマルタ人とリビア人の軋轢から来る暴力事件が複数回発生し、警察が中学校へ出動した。実際に筆者自身も、2016年にリビア人の男女の団体がスリーマの路上で昼間から泥酔して暴れており、その場から急いで逃げた経験がある。筆者がこの団体がリビア人であるとわかった理由はここでは伏せておく。

他にも、マルタ最大の公立病院で大学病院でもあるマーター・デイ病院は、軍事衝突による負傷者や病気の治療が必要なリビア人によって病室ベッドが満床となった時期が続いた。マルタ住民が病院を利用

²⁸ 2011年、マルタの首相ローレンス・ゴンジ（Lawrence Gonzi、国民党）は国連決議（1973）を支持し、同年夏にはカッザーフィーやその家族、側近らがマルタに逃亡してきた場合にはICC送りになると発表している。ゴンジはリビアが自由、正義、人権に基づく近代的で民主的な国として再建しなければならないと繰り返し主張した。

²⁹ 2021年7月9日 マルタ国家統計局（NSO）、ニュースリリース。

³⁰ 2017年11月4日 *Malta Today*.

出来ない状況が続き、外国人に寛容なマルタの人々もさすがに困惑が隠せないようだ。

とはいっても、リビアとマルタは長きに渡って運命を共にした隣人である。今年の3月末、トリポリのマルタ大使館がリビア人に対してシェンゲン観光ビザの申請受付を再開し始めた。今年の5月には、マルタの航空会社 Med Air が限定的ではあるものの、リビアのミスラータ空港へ商用機を飛ばしたとの明るいニュースも入ってきてている。他のEU諸国に比べマルタがリビアに寛容なのは、資源を持たないEU加盟国と資源を持つ紛争国という経済的依存関係も大きいだろうが、国民がこれまでの互いの境遇を理解しあった特別な関係にあることも理由にありそうだ。「近くて遠い」が「近くて近い」になるのは「もうすぐ」であることを願ってやまない³¹。

³¹ 本稿におけるリビアの歴史については、塩尻和子編（2020）『リビアを知るための60章』第2版、明石書店。から多くのことを学ばせていただいた。ここに深く感謝の意を表したい。なお同書では、日本ではあまり伝えられないリビアの内紛の状況や、カッザーフィー政権に関する貴重な資料も読むことができる。まさに、「リビアを知るため」の必読書である。